



## POINT 1

思・判・表

## 言語活動の「必然性」を高める工夫と「書く力」の育成

中学校外国語科の学習において「書く力」を育成するためには、学習指導要領の趣旨及び子どもたちの実態を十分に踏まえる必要があるだろう。その上で、適切な指導時期を明確にして、各学年で子どもたちに身に付けさせたいことを系統的に指導し、その成果を3年間で着実に積み重ねていくことが重要ではないだろうか。

そこで、自校における「書く力」の系統的な育成に向けて、外国語科担当教員と連携・協働しながら「英語の学習で大切にすること」を以下の3点に集約した上で、子どもたちとの共有を図った。

- 「使うこと」「返すこと」「つなぐこと」の3つを意識する。
- 教師が目的・場面・状況を明確にした上で必然性のある言語活動を設定する。
- 間違いを恐れずに発話できる学習環境を整える。(合言葉は“Mistakes are OK!”)

子どもが書くことに対して必然性を感じられるよう、以下に「目的・場面・状況」を重視した具体的な言語活動の実践例を紹介する。

## 1 SMSを使った目的・場面・状況の意識化

1 学年の授業では、Google Classroom を活用して1 単位時間の学習目標をSMS (Simple Mission Statement: 本時目標の明示) として提示した。学習目標を「今日は～できるようになる」という形で明示することで、子ども自身が見通しをもって学習に臨めるように工夫した。

例えば、教科書(教育出版)にあるLesson 3「Club Activities」の単元では、過去形を活

用して「自分の理想の1日を想像日記として発表する」という学習課題を設定し、目的意識をもって書く活動を展開した。子どもたちは「どんな情報を伝えれば、相手に伝わるのか」を考えながらライティングに取り組み、発表後には相互評価を行った。

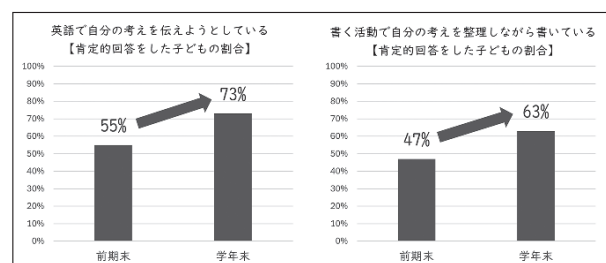


【必然性をもって書く活動に取り組む子ども】

## 2 書くことの指導改善

書くことの指導においては、教科書の「Tips for Writing」を精読させた上で、Writing Frame を活用した。これにより、子どもは「事実→理由→例→結論」の論理的な文章構成を意識して執筆できるようになった。また、活動前に「読み手は誰か」「何のために書くか」を繰り返し問い掛けることで、相手意識の醸成にも留意した。

以上により、前期末と学年末とのアンケート結果の比較では、書くことに対する肯定的回答が増加した。



清水町立清水中学校 教諭 土井 誠人



## POINT 2

知・技

## 知識及び技能の「習得」を「活用」へとつなげる系統的な指導の工夫

学年をまたぐ系統的な学びを保障し、着実な授業改善を継続していくためには、教師が以下の3点を常に意識し、実践に反映させていくことが重要であろう。

- アウトプット活動に「必然性」をもたせること。
- ⇒目的や相手意識が明確な言語活動の設定
- 「使うこと」「返すこと」「つなぐこと」を学習ルーティンに組み込むこと。
- ⇒Activities Plus を中心とした帯活動の定着
- 長期的な視野で評価設計をすること。
- ⇒パフォーマンステスト・ライティング・聞くことを組み合わせた多面的評価の実施

そこで、「話すこと」及び「読むこと」の領域に着目し、それぞれの観点から具体的な授業改善の方策を紹介したい。

## 1 間違えることへの不安を低減する工夫

子どもたちが即興でのやり取りに対し、「間違えを恐れて発話量が伸びない」という課題がある場合には、帯活動として即興での対話を取り入れてみてはどうだろうか。

自校では、「Activities Plus」と称した5分間の帯活動を毎時間継続している。この活動においては、授業者が「Mistakes are OK! (間違えても大丈夫!）」などの声掛けを徹底し、子どもの心理的な不安を軽減させることが極めて重要であろう。

1. Practice with your partner.

A: question	B: answer
1. What is your <b>name</b> ? <b>Who</b> are you?	I am... (名前)
2. What's your favorite <b>app</b> ?	I like <b>Line app</b> . I can <b>talk with my father in Singapore at any time</b> .
3. Who's your favorite <b>musician</b> ?	I like <b>BTS</b> the best.
4. What time do you <b>have dinner</b> ?	I <b>have dinner at 7:30</b> .
5. Can you cook <b>yakimeshi</b> ?	Yes, I can. I'm good at <b>cooking it</b> .
6. Do you have any <b>pets</b> ?	Yes, I do. <b>The name is...</b> No, I don't. I want one some day.
7. When is your <b>birthday</b> ?	It's <b>December 13th</b> .
8. What do you do in your free time?	I <b>watch You Tube</b> .
9. How many <b>brothers</b> do you <b>have</b> ?	I have <b>2 brothers (and sisters)</b> .
10. Are you from <b>Hokkaido</b> ?	Yes, I am. / No, I'm not. I'm from ○○.

2. 英語で質問攻めにするとき、他に聞いてみたい質問を考えてみよう

【即興対話で活用するための資料の例】

この活動を1年間継続した結果、アンケートで「授業中に英語を使うことに不安を感じる」という項目において、「そう思う」と回答した子どもの割合が前期末の61%から学年末には45%へと大幅に減少した。この成果は、子どもたちの実態や課題を的確に捉え、必要な指導を粘り強く継続することの重要性を裏付けるものと言えるだろう。

## 2 文章を読む前に目的設定を具体化する工夫

代名詞が指す内容を捉える力の不足や、長文を漫然と読んでしまうといった課題に対し、以下の2点が有効だろう。1点目は、「Tips for Reading」の手法を活用して、代名詞を探す帯活動を習慣化することである。2点目は、読解の目的に応じて事前に課題を設定することにより、子どもに主体的な読みを促すことである。